

## 巻 頭 言

病院長

高 橋 典 之

『事実、市中から立ち上る喜悦の叫びに耳を傾けながら、リウーはこの喜悦が常に脅かされていることを思い出していた。なぜなら、彼はこの歓喜する群衆の知らないでいることを知っており、そして書物のなかに読まれうることを知っていたからである—ペスト菌は決して死ぬことも消滅することもないものであり、数十年の間、家具や下着類のなかに眠りつつ生存することができ、部屋や穴倉やトランクやハンカチや反古<sup>ほこ</sup>のなかに、しんぼう強く待ち続けていて、そしておそらくはいつか、人間に不幸と教訓をもたらすために、ペストが再びその鼠どもを呼びさまし、どこかの幸福な都市に彼らを死なせに差し向ける日が来るであろうということを。』  
（カミュ：“ペスト” 宮崎嶺雄訳新潮文庫）

度重なる緊急事態宣言と ICU の休床、感染病床増床に伴う一般病床の一時休床など COVID-19 が引き起こした医療環境の急変は、われわれの意識も変える事になる。カミュが“ペスト”の中で何を述べているか。ペストの病原性ではなく、武器を持たない人間の変わり様であった。

災害の度に当院職員は『何をなすべきか』を考え変わって来た筈である。しかし、自分の何が、どの様に変ったかを知る必要がある。これを狭義の認識論と言う。自分自身の成長を認識するには文章を書くことである。特に論文と呼ばれる形態は、査読と言う客観的操作が入り、自己満足<sup>ことごと</sup>を悉く論破してくれる。

今回三篇の原著が投稿され、何れも各分野で多職種の協力のもと、研究されたものと拝見しました。今後ますます原著論文の投稿が増加する事を期待します。

「認識論的障害」や「認識論的断絶（アルチュセール）」の概念導入したガストン・バシュラール Gaston Bachelard は『感覚的認識と科学的認識のあいだに本当の実在的な断絶が存在することを、われわれはどうしても認めなければならないのである。』（「科学的精神の形成」平凡社ライブラリー p. 402）と述べている。われわれの臨床医学が上記認識論の相剋を実感する為にも論文は重要である。

最後に冒頭の“ペスト”の一節はわれわれ医療者が感染症に対する時、忘れてはならない要約である。